

## 中国語の語りにおける知覚動詞の用法について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今井, 敬子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00001112">https://doi.org/10.14945/00001112</a>

# 中国語の語りにおける知覚動詞の用法について

今 井 敬 子

## はじめに

小論では、中国語の語りを支える言語的特性の一側面を明らかにすることを目的に、知覚動詞の一用法について考察する。中国語の知覚動詞「見」「听」などが「只」「忽」などの副詞と共に用いられる形式は、小説などの語りの中でのみ見られるが、この用法は、一文を越えて前後の文脈を内容的に取り込むことが必須であるなど、知覚動詞が一文の内部で用いられるときのふるまいとは異なった様相を見せる。小論では、この形式の構造特性と、語りの中での機能について考察したい。1. では、対象とする形式の範囲の確定および出現環境について調査・考察し、2. では、前件の語法的特徴とその構成要素について、3. では後件と前件との対応関係について見ながら、旧白話章回小説の語りの中で用いられるときの機能について述べる。4. では知覚主体について考察し、5. では語りにおける表現効果について述べ、最後に旧白話章回小説と当代小説との間に見られる用法の差異について若干触れる。

## 1. 考察対象とその出現環境

小論で対象とするのは、知覚動詞の以下のような用法である。

- (1)～水边系着一只小船。两个人商量着，要上船玩去；正往下走，只见母亲在山下亭中招手叫他。到了亭前，只见婢婢无力地倚着亭柱坐着，眼中似有泪痕。妹妹连忙走过去～（寂寞）（水辺に小舟がつないであった。ふたりは相談して、船に乗っていこうということになった。（道を）下っているとき、母が山のふもとの東屋で手招きして彼を呼んでいるのが見えた。東屋に着くと、叔母が力なく柱にもたれて腰掛けていて、目には涙の跡が残っているようだった。妹は急いで歩み寄り～）

(1)の二箇所に見られる「見」、はいずれも「只」と共起して用いられ、知覚主体の視野に入った情景などが「只見」の直後で述べられている。このような「見」の用法は、以下のような語法上の特徴を持つ。すなわち、目的語の位置には通常主述句が置かれ、名詞のみを置くことはできず、また、「了」「着」「过」などのアスペクト辞を伴うこともできない(毛1987.、原田1997a. b.)。これらの性質は、以下の(2)に見られるように、知覚動詞が一文の中で用いられる場合の語法上の性質とは異なったものである。

(2)邢夫人～从后门出去，打鸳鸯的卧房前过。只见鸳鸯正然坐在那里做针线，  
见了邢夫人，忙站起来。(红楼梦 第46回)(邢夫人は～裏門から出て、  
鸳鸯の部屋の前を通ってみた。すると、鸳鸯は座って針仕事をしている  
ところで、邢夫人の姿を見るとあわてて立ち上がった。)

(2)の中のふたつめの「見」のように、通常は名詞を目的語にとり、アスペクト辞(ここでは「了」)を伴うことができるが、「只见」の形式をとるとそれができない<sup>1)</sup>。

毛1987.、原田1997a. b.によると、更に以下のような特徴が見られる。すなわち、「只见～」は、主語の位置に知覚主体を表す語句が明示されず、また、その直前の文の述語動詞に制限が見られる。そして、知覚動詞のこのような用法は、論述文や説明文には見られず、小説などの語りに見られ、特に旧白話章回小説に多用されている。「見」のほかにも、「看见」「看到」「听」「听见」「听到」「听得」や「觉得」「感到」などの語に同様の用法が見られ、また、「只」のほかにも「但」「忽」「却」などの副詞が共起する。「只」の本義は「範囲の限定」であるが、「只见」の「只」はある対象への特別の関心という派生的な意味で用いられていることを毛1987.では指摘している。

ここで、「只见」の出現環境に関して、以下の例を見ていただきたい。

(3)我到处找他找不着，急得满头大汗，后来，我走进体育馆，只见他一个  
人在跑步，我忙喊道：“小张，你让我找得好苦！”(僕はくまなく彼を探したが見つからず、気が急いで顔中汗が噴き出していた。その後、体育館に入っていくと、彼が一人で走っていた。僕は急いで叫んだ「張君、随分骨折って探したんだぞ！」)(毛1987.)

<sup>1)</sup>「只见～」の「見」、「听」などが「了」、「着」、「过」などのアスペクト辞を伴うことができず、かつ、その直後において具体的な知覚内容が表されることは、ちょうど、「说」などの発言動詞が、その直後に具体的な発話内容が述べられる場合には、アスペクト辞を伴うことができないことと類似している。



(4)、(5)の前件には知覚動詞「听」、「看」がそれぞれ用いられている。

前件 [S1V1] 中に知覚動詞が置かれる場合は、その動詞によって表される知覚活動(見る・聴く)によって生じた結果(見え・聞こえ)の内容が、後件 [S2V2] において述べられるという、行為と結果の関係(即ち「見た結果、見えた」として自然に理解ができる。このことから、「只见～」の前件に知覚動詞が置かれた場合(例えば:「看…只见…」)を、この用法の基本形式とみる考え(申2003、253頁)は妥当であり、また、以下に順次検討していくように、知覚動詞ではない動詞が前件に置かれた場合でも、その後知覚動詞を補うことができることから、知覚動詞はこの構造の構成要素であって、実際の個別の文章の表面には現れることも隠れていることもあるものと理解できる。

次の(6)では、前件の述語動詞によって動作主体の空間移動が表されている。

(6)堂屋里一个人也没有了，喜烛燃尽了，屋檐下的红灯也灭了。我走进和妈妈同住的那间可怜的小房，只见妈妈也才回来，正在解围腰，打鞋子上的土。她忙了好些天，她累了。(撒尼大爹)(正房には誰もいなくなっていた。お祝いの蠟燭は燃え尽きていて、軒下のお祝いの灯火も消えていた。母さんと暮らした哀れな小部屋に入ると、母さんもやっと戻ってきていて、腰巻を解き靴の土埃を払っていた。母は何日も忙しく、疲れていた。)

(6)では、動作主体の空間移動によって新たな視野が開け、後件で述べられている光景がその視野に入ってくる、という関係がみられる。

次の(7)の前件では、姿勢を変える動作が表されており、(8)の前件では、灯りを傾けるという動作が、(9)ではふすまを開けるという動作がそれぞれ表されている。

(7)(宝玉)口里说着，忽一回身，只见林黛玉坐在宝钗身后抿着嘴笑，用手指头在脸上画着羞他。(红楼梦 第28回)(宝玉は口の中でぶつぶつ言っていました。ふと振り返ると、黛玉が宝钗の背後にすわったまま、口をすぼめて笑い、指で顔に八の字を書いて彼をからかっているのです。)

(8)宝玉听说，果然持灯向地下，只见一口鲜血在地。宝玉慌了～(红楼梦 第30回)(宝玉はそれを聞いて、灯を床に向けると、鮮血が床に滴っていました。宝玉はあわてて～)

(9)“～你大概认为因为妈妈不给你钱，你就可以去偷别人的东西呀。”贝岛听见老婆一边这么说不一边吭吭地咳嗽着，就不由得倒吸一口冷气，急忙拉开病人房间的纸隔扇。只见大儿子启太郎被祖母和母亲紧紧追问，显出局

促紧张的样子。“启太郎，你为什么挨说？（小小王国）（～お前はまさか、いくらお母さんがお錢を上げないからと云って、人の物を盗んで来たのじゃありませんまいね）こう云いながら、ごほん、ごほんといふ咳をしている細君の声を聞くと、貝島は思わずぎょっとして急いで病室の襖を明けた。そこには総領の啓太郎が、祖母と母親とに左右から問い詰められて、固くなって控えているのであった。「啓太郎、お前は何を叱られているのです。～（小さな王国）」

(7)、(8)、(9)の前件に置かれた姿勢動詞や動作動詞はいずれも、対象を見るとき知覚活動を成立させるためにとられた姿勢や動作を表していることから、主体の空間移動を表す動詞に準じるものと考えられる。また、これらの動詞は必ずしも完成アスペクト辞を伴ってはいないが、実際には、それらの動作・行為が遂行され完成して初めて、知覚活動が成立し、その結果として後件での光景が視野に入ってくるのである。このように、主体の空間移動、姿勢の変化、道具などを用いて新たな視界を開くことを表す動詞が前件に置かれる場合は、その動作・行為が完成しているという特徴が見られるが、以下に見るように、これらとは異なった動詞が前件に用いられると、アスペクトの面で別の異なった制限が見られる。以下の例を見ていただきたい。

(10)张桐说完话，只见他那瘦长影子在窗纸上晃来晃去，半天才摇头叹气说：“张仁兄，～（房客）（張桐が話し終わると、彼（魏云清）の細長い影が窓に映ってゆらゆらと揺れていたが、しばらくしてから首を振って嘆息しながら言った「張にいさん、～）」

(11)二人正说着，只见湘云走来，笑道：“二哥哥，林妹妹，你们天天一处玩，我好容易来了，也不理我一理儿。”黛玉笑道～（红楼梦 第20回）（二人がちょうど話していると、湘雲が入ってきて、笑いながら「お兄様、リンさん、おふたりはいつもいっしょに遊んでいて、私がやっとのことで来たというのに、構っても下さらないのね。」と言いますと、黛玉は笑いながら～）

(12)妹妹～笑道：“凉快极了，只是底下有青苔，滑得很。”他慢慢地跑起来，只听见脚下水响。妹妹～（寂寞）（妹は～笑顔で「すごく冷たい、でも底に苔があってヌルヌルしてるよ。」と言った。彼がそろそろと駆け出すと、足の下で水が音を立てた。妹は～）

(13)一语未了，只听窗外竹子上一声响，恰似窗屋子倒了一般，众人唬了一跳。（红楼梦 第70回）（その言葉が終わらないうちに、窓外の竹のところで

ドンと音がして、まるで葺戸の支え棒が倒れたかのようで、みなは跳び上がるほど驚きました。)

(10)は行為が完了したばかりであること、(11)は行為が進行中であること、(12)は動作の開始、(13)は行為の未完了をそれぞれ表している。

このように、これらの動詞が、「～し終わったばかり」、「～している」、「～し始める」、「～し終わっていない」、「～しようとしている」<sup>2)</sup>などの動作・行為の段階にあることを表す場合に前件に用いられることは、先に見た空間移動、姿勢の変化などを表す動詞が、その動作が完成したことを表して前件に用いられることと対照的である。これらの動詞の場合は、後件で述べられる新たな事象・出来事との間に接点を見つけようとした場合、前件での動作・行為を始めたところであったり、進行中であったり、終わったばかりであったり、或いはまだ行っていないような段階であるならば、そうした背景的な状況のために、その時点を捉えて、後件での出来事などの介入が瞬間的に発生しやすい、ということであろう。

以下の例も、上に準じるものと考えられる。

(14) 刚到这里，忽听外面人吵嚷起来，又说：“不相干的，别唬着老太太。”

(红楼梦 第39回) (ここまで話したところで、突然、外で人の騒ぐのが聞こえました。「たいしたことはない。ご後室を驚かせるのはいけない。」と言っています。)

(15) 郭孝子走到天晚，只听得山洞里大吼一声，又跳出一只老虎来。郭孝子道：

“我今番命真绝了！”(儒林外史 第38回) (郭が歩いているうちに日が暮れてしまった。すると、山の洞穴から大きな吼え声が聞こえ、またも虎が1匹跳び出してきた。)

(14)の前件では、話すという行為が時間の流れの中である段階まで続けられたことを、(15)の前件では、歩くという動作がある時点まで継続したことが表わされている。これらの場合も、継続する動作・行為が遂行過程のある段階(時点)まで達したことが前件で表されている点で、(10)～(13)の場合と共通している<sup>3)</sup>。

上に挙げたような動作・行為は時間的な幅の中で遂行されるものであり、「只見～」によって導入されるところの新たな事象や出来事が介入してこなければ、

<sup>2)</sup> 例(10)の前件では、動作が開始しようとするのが表されている。

<sup>3)</sup> 例(15)の場合は、前件の述語動詞「走」が空間移動を表す動詞であることから、この例の場合は移動動詞のグループに分類することも可能である。

前件の動作・行為はそのまま遂行されていたであろうと思われるものである。後件〔S1V1〕で表される事象・出来事が、しばしば思いがけないものであったり、突発的なニュアンスを帯びて読み取れる(毛1987.)のは、動作・行為の遂行のある段階(始まり、途中、完了直後など)に切り込むように、後件で表される新たな知覚対象が、視野に入り込んでくることが表されているからであろう。

このように見てくると、前件に知覚動詞が置かれられない場合(実際には文の表面に現れないだけであろうが)でも、前件と後件との間には、時間の隣接(空間移動、姿勢の変化などの場合)や時間の重なり(その他の動詞の場合)が見られることがわかる。

以上のように、前件に述語動詞が置かれる例が最もよく見られたが、以下のように、時間を表す語句が単独で置かれて前件を構成している例もある。(16)では時間の経過を表す語句が、(17)では時点を表す語句が置かれている。

(16)少頃、只见宝钗薛姨妈等也进入去了。忽见紫鹃从背后走来，说道：“姑娘吃药去罢，～(红楼梦 第35回)(まもなくして、宝钗や薛姨妈たちの入っていくのも見えませんでした。と、突然、紫鹃が背後からやってきて「お嬢様、お薬をお飲みにお帰り下さい。～」と言いました。)

(17)妈妈装作睡了的声音“嗯”了一声，表舅叫妈妈明早鸡叫头遍就做，说他要出远们。第二天，只见表舅和大队长都坐着滑竿出城，后面跟着箱子，铺盖，还有十来个团兵。(撒尼大爹)(母さんが狸寝入りでグーという声を出した。おじが、明日の朝は遠出をするから一番鶏が鳴いたらご飯を用意してほしいと母さんに頼んだのだ。翌日、おじと大隊長はそろって竹駕籠に乗って町を出た。箱と夜具と十人ばかりの兵隊が後に従っていた。)

上のように、前件に時間詞などだけが置かれた例は、今回の調査の限りでは多くはないが、動詞が置かれる場合に時間の隣接・重なりが見られたように、時間が、この構造にとって欠かせない要素であることから、時を表す語句だけが単独で置かれることによっても、この構造が成立するのであろう。

次の(18)、(19)のように、時を表す語句に続いて、ある状態・状況などが前件で述べられている例も、少数ながら見ることができた。

(18)那一日早上，连饼也没的吃，只见外面走进一个人来，头戴方巾，身穿无色直裰，走了进来，和他拱一拱手。季恬逸道：“贱姓季。”那人道～(儒林外史 第28回)(ある日の朝、食べるピンもなくなっていると、外から

人が入ってきた。方巾をかぶり黒い直裾を着ていて、入ってくると季に向かって丁寧にあいさつをした。季恬逸が「季と申します。」とあいさつすると、その人が言うには～)

(19)等到三更尽后，月色分外光明，只见老虎前走，后面又带了一个东西来。那东西浑身雪白，头上一只角，两只眼就像两盏大红灯笼，直着身子走来。郭孝子认不得是个什么东西。只见那东西走近跟前，便坐下了。(儒林外史 第38回) (三更が過ぎ去ろうとする頃、月の色がことさら明るい。と、虎が前からやってきた。後になにかをつけている。それは全身が雪のように白く、頭に角が一本あって、両目は大きな赤い燈籠のようで、直立して歩いてくる。郭孝子はそれが何なのか分からないでいると、それはすぐ前まで近よってきて座り込んだ。)

(18)では、冒頭に時を表す語句が置かれ、続いて、その時における作中人物の状態が述べられている。(19)では、冒頭に時を表す語句が置かれているが、ここで示された「時」は(19)の文章全体に共通した「時」を表している。それに続いて、最初の「只见～」の前件では、その時におけるある種の状況(やがて後件で述べられるところの出来事が起こる場の光景)が表されている。二番目の「只见～」の前件では、作中人物に関するある状態・状況が述べられている。

前件については、このほかに、旧白話章回小説の中で、「只见」が段落の冒頭に置かれた例が見られる。段落分けは、読み手によって必ずしも一定のものとはいえないが、そこに段落を置くには、内容的なまとまりを感じ取っているということである。(20)は、「只见」が段落の冒頭に置かれている例である。

(20)和尚～说道：“本村失了火，凡被烧的都没有房子住，一个个搬到我这庵里时，再盖两进屋也住不下，况且你又有个病人，那里方便呢？”只见庵内走出一个老翁来，定睛看时，不是别人，就是潘保正。(儒林外史 第16回) (和尚が～「この村は火事で、罹災者は住む家がなくなり、一人また一人と私の庵に移ってきて、二棟建て増しても足りないのです。おまけにあなたのところは病人がおありなので、ご不便でしょう」と言った。と、そこへ庵から老人が出てきた、目を凝らして見ると、他ならぬ潘保正だった。)

(20)の原文では、「只见～」のところから改行され、その直前である前段落の末尾にはせりふが置かれている。「只见～」の前件を構成するはずの動詞句や時を表す語句などは、ここでは用いられていない。前件と見なせる箇所を見つけるならば、前段落末尾のせりふの内容が示すその場での状況であろうか。

以上のように、「只見～」の前件には、典型的なものから周辺のものまでが見られるが、動詞句が置かれる例が最も多く見られ、その場合の前件と後件には、先述したように、時間的な隣接や重なりが見られることが、この構造のポイントの一つと言えそうである。

次節では、前件と後件のつながりについて検討していく。

### 3. 後件と前件の関連性について

後件〔S2V2〕において表される「見え・聞こえ」の内容としては、事物・人物の状態・様態・様子、自然の風景など、静的な情景・光景と、動作・行為など動的なものとの両方が見られ、先述した前件の述語動詞のように、明らかな使用制限は見られないようである。後件で表される内容の最大の特徴は、それが、知覚主体にとって思いがけない・予測を越えたような情景であるということである。なぜなら、前件〔S1V1〕と後件〔S2V2〕との内容には、もともと何の因果関係も見られない。たとえば、例(1)において、前件の「(船着場に下りるために)道を下る」ことと、後件の「母が手招きして呼んでいる」こと、或いは例(11)の前件「話をしている途中である」ことと、後件「湘雲が入ってくる」こととの間には、特に内容的な関係は見られない。ただし、両者には時間的な重なりや隣接が見られる。そのため、「只見～」は、前件で表される動作・行為の遂行される時点・状況などと、後件で述べられる「見え・聞こえ」としての現象や出来事とを結びつける接続詞のような役割をしているかのようにもみえる。

後件と前件とを少し詳細に見比べてみると、両者の間には、ある対応関係が見られる場合が多い。すなわち、①前件に知覚動詞が置かれた場合は、後件に存現文が見られる傾向がある。(例：5、21)。②前件に空間移動や姿勢の変化などを表す動詞が置かれた場合は、後件には動作の進行・持続や静的な現象・事象が表される傾向がある(例：1、2、3、6、7、8、9、22)。③前件に置かれた動詞について、動作・行為の進行、開始、未完成、完成直後などの段階にあることが表されている場合は、後件では動作や動的現象が表われる傾向がある(例：10、11、12、13、23、24)。以下に例を追加してみよう。

(2)然而，犍陀多无意之中抬起头来向血池上空睥目一望，只见寂静异常的一片黑暗中，从遥远的天边垂下一缕银色的蜘蛛丝。(蜘蛛丝)所が或時の事でございます。何氣なく犍陀多が頭を擧げて、血の池の空を眺めます

と、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、～～自分の上へ垂れて参るのではございませんか。(蜘蛛の糸)

(2) 肃金铉听了，同他一齐来到状元境刻字店。只见那姓诸葛的正在那里探头探脑的望～(儒林外史 第28回) (肃金铉はこれを聞くと、彼(季恬逸)とともに状元境の印版屋へやって来た。するとそこでは、その诸葛という姓の男が首を長くして待っていた。)

(2)は前件では知覚動詞が用いられ、後件では存現文によって事物(蜘蛛の糸)の出現が表わされている。(2)の前件では主体の空間移動が表され、後件では「待ち望む」という静的な行為が表されている。

(2) 这时，他看见后门口正停下一辆自行车，原来是老克腊，他正要叫，却见老克腊径直开了后门进去，门轻轻地关上了。(长恨歌) (そのとき、彼は裏門のところに自転車が見えた。“オールド・カラー”のやつだった、彼は呼びかけようとしたが、“オールド・カラー”はすぐに裏門を開けて入って行き、門はスーッと閉じてしまった。)

(2)の前件では「呼びかける」行為がまさに始まろうとしていることが述べられ、後件では継起する動作・事態(門を開けて、入り、門が閉まる)が述べられている。

また、例(14)の前件「走到天晚」と(15)の前件「说到这里」は、動作行為がある時点や段階まで継続したことを表しているが、(14)、(15)のいずれ場合も、後件は動的(騒ぎ出した、一声吼えた)であるので、これらは、前件に置かれた動詞が動作・行為のある段階を表す場合(③)と類似した結果となっている。

以上の①、②、③を照らし合わせると、次のことが考えられる。すなわち、②においては、前件で述べられた空間移動等が遂行されたことによって新たな視野を得た主体が、後件で表される静的な光景などの持続状態のある時点(知覚の時点)において、その静的状態の中へ入り込むようなかたちで、知覚活動を成立させ、その結果の「見え・聞こえ」が後件で表されるような内容となって引き出される、と言えようか。また、③の場合は、ある時間幅の中で遂行・継続している動作・行為などが、ある段階(時間的側面)に達していることが前件で表され、そこへ、後件で表される別人物の動作や出来事など動的な事象が入り込むように発生・出現したことが、知覚主体によって知覚される、と言えようか。

次の(24)は上の分類では②に入るが、特に旧白話章回小説の語りの中で頻繁

に用いられて、『紅樓夢』ではほとんど定型となっている形式である。

(24) 有人回说：“姨太太来了。”贾母等刚站起来，只见薛姨妈早进来了，一面归坐，笑道：“今儿老太太高兴，这早晚就来了。”家母笑道～（紅樓夢 第40回）（「奥様がお着きです。」と知らせが入り、後室等が立ち上がると、薛姨妈が早くも入ってきて、席に着きながら笑顔で「きょうは大奥様のご機嫌がよろしいので、こんなに早くまいりましたの。」と言いました。）

(24) のように、新たな人物の物語場面への登場が、知覚主体の視野に入る出来事として提示され、続いてその人物との対話・会話が始まるという一連の形式は、旧白話章回小説でしばしば見られる。『紅樓夢』では、ストーリー展開のための典型的な方式のひとつとなっている。毛1987. では、「只见～」は後続文脈とも必須の関係をもつとしているが、(24) のような場合もその代表例であり、後続文脈では会話が続いて物語の展開につながっていくのである。

新たな人物の物語場面への登場を、出来事としてそのまま述べるのではなく、知覚主体の視野に入った出来事として提示するのは、知覚主体との接点・関わりを示そうとしているからであろう。その際、知覚主体が明示されず、文脈をたどっても必ずしも容易には特定できないことは、局外にある全知の語り手の視点と作中人物の視点とが、往々にして不分明である『紅樓夢』のような作品においては、何の不都合なこともない。誰が知覚主体であるかということは、さほど重要なことではないのである。しかし、後述するように、当代小説ではこの形式はほとんど用いられなくなる。

後続文脈の内容は、後件のS2についての内容か、前件のS1についての内容かという点、(25) のようにS1の場合も少数見られるが、多くは(26) のように、S2についての叙述である。

(25) 二人正说话，只见丫头来请吃饭，逐都往前头来了。王夫人见了林黛玉，～（紅樓夢 第28回）（ふたりがちょうど話しているところへ、侍女が来て食事の時間だと伝えたので、（ふたりは）前の部屋へ来ました。王夫人は黛玉を見て～）

(25) では下線部の動作主体は前件のS1（「二人」）である。

(26) 晴雯听了，只得拿了帕子往潇湘馆来。只见春纤正在栏杆上晾手帕子，见他进来，忙摆手儿，说：“睡下了。”晴雯走进来，～（紅樓夢 第34回）（晴雯はそう聞いて、やむなく潇湘館へやってきました。と、ちょうど春纖が欄干にハンカチを乾していて、晴雯が入ってきたのに気づくと、

あわてて手を振って、「(黛玉さまは) お寝みになりましたの。」と言いました。晴雯は入り込んできて～)

(26) では、後続文脈の下線部はS2 (春纤) についての叙述である。

『紅樓夢』では、(26) のように後件での動作主体についての叙述がその後も続いてゆく例が多数見られ、そのような例もまた、そのまま物語の進行・展開へとつながっていく場合が多い。

#### 4. 知覚の主体について

「只見～」構造の後件において述べられる事象を、知覚されたものとして提示することは、その事象と知覚主体との間に何らかの接点を設けようとするからであろうが、それでは知覚主体とは誰を指すのかということが問題となってくる。

「只見～」構造は「只」+動詞(知覚動詞)+目的語(知覚内容)」という構成になっているが、主語の位置には常に何も置かれない。「只見」が文頭に置かれる例も少なくないが、その場合も主語の位置には何も置かれないため、知覚主体が指し示す対象は先行文脈から探し出さねばならない。ところが、前件[S1V1]の主語がそのまま引き継がれて「只見～」の知覚主体となっているように理解できるものばかりでなく、そうとは理解できないものも少なくない。

(27) 有四个女人骑马，马场里就是一片尖叫声。只见四匹马一溜排开，在场子里奔驰，每匹马上都高坐着一个头发飘散，两眼发直，狂叫不已的女子。

(过把瘾就死) (四人の女が馬に乗り、馬場は甲高い声に満ちている。

四頭の馬が一行に並び、馬場を疾走しているが、どの馬にも、髪を振り乱し、目を釣り上げて、叫びやまない女が乗っている。)

(27) の知覚主体は、前文の「四人の女」であるとは考えにくい。この小説の一人称の語り手、或いは、馬場にいる作品中の観衆が、語り手の視点を反映して知覚主体となっていると考えるべきであろう。申2003. では、このように、主語が示されないことと、「只見～」の直後から新たな事象や出来事が述べられるという特徴に着目し、「只見～」は「動詞+目的語」の述謂構造ではなく、「話頭」(話のきっかけ、接ぎ穂) であるとしている。

しかしながら、「只見～」は、やはり語りにおける視点と無関係でないことは確かなようである。それは、(28) のように、前件での移動主体などが主要人物でない場合は、後件に別人物の登場があっても、その様子を「只見」で導いてはいないことから推察される。

(28) 丫头方进来时，忽有人来说：“傅二爷家的两个嬷嬷来请安，来见二爷。”  
(紅樓夢 第35回) (侍女が入ってきたその時、突然、使いが来て「傅さまのお宅の老女がご挨拶に来られて、坊ちゃまにお会いしたいと言っています。」と伝えました。)

(28) において、「忽見有人来说～」とすると、前件のS1である「丫头」(侍女)が知覚主体となるような読みの可能性が生じてしまう。しかしながら、この侍女は物語において主要人物ではないため、彼女の視点から出来事を眺めるようなことは通常ありえないので、この例では「只見～」が用いられていないのであろう<sup>4)</sup>。

## 5. 表現効果

「只見～」構造には、「只」以外にも「但」、「忽」、「却」などの副詞が共起して用いられ、知覚された現象・事象が突如として視野に入りこんできたり、思いがけないものであったり、ひときわ注意をひくものであったり、という意味が付与されたり強調されたりする。

毛1987.では、「只見～」の前後文脈には「緊張した雰囲気」をもつ背景描写が必要であると指摘している。次の例は、継起する一連の思いがけない出来事が、次から次へと視界に入ってくる緊迫した様子を、「只見～」を連続使用することによって表している。

(29) 到第三日，雪晴。……郭孝子辞别了老和尚又行，……郭孝子走的慢，天又晚了，雪光中照着，远远望见树林里一件红东西挂着。半里路前，只见一个人走，走到那东西面前，一交跌下涧去。郭孝子就立住了脚，……定睛细看，只见那红东西底下钻出一个人，把那人行行李拿了，又钻了下去。郭孝子便急走上前去看。只见那树上吊的是个女人，披散了头发，身上穿了一件红衫子，……(儒林外史 第38回) (三日目に雪が晴れた。……郭孝子は老和尚と別れ旅を続けた。……郭は歩みが遅く、また日が暮れると、雪明りに照らされて遠くの林の中に赤い物が掛かっているのが見えた。半里ほど前には人が歩いている。が、その赤い物の前まで行くと、倒れて谷間に落ちていった。郭は足を止めて……目をこらしてよく見ると、その赤い物の下から人間が現れ出て、谷に落ちた人の荷物を取ると、

<sup>4)</sup> 『紅樓夢』に見られる語り手の視点と作中人物との視点に関わる言語標識については、拙稿(1995)で取り上げている。

またもぐり消えた。郭は…急ぎ足で近づいて見ると、樹上から女が降り下がっていて、髪はばらけ、赤い単衣を着ていて……)

新たな現象・事象が視野に入ってくる度に、そのすべてが「只見～」によって導かれるわけではない。眼前に展開する現象・事象などの中から、ひとときわ注意を引くものが選択されて「只見～」で導かれていると理解できる例を見よう。

『紅樓夢』には、林黛玉が祖母の下で養育されるために、長旅の後に榮国邸に入り、祖母を始めとして、姉妹や宝玉に初めて会うまでのことが時間を追って順に述べられている件があるが、その中から「只見～」が現れる箇所を取り出して順に追ってみたい。

(30) 又行了半日，忽见街北蹲着两个大石狮子，三间兽头大门，门前列坐着十来个华冠丽服之人。(紅樓夢 第3回 以下同じ) (さらにしばらく行くと突如、通りの北側に大きな石の獅子が蹲まわっていて、鬼瓦の三仕切りの表門には、門前に華やかな衣装の十人ほどのが座っています。)

この後、屋敷の中の様々な光景が、駕籠に乗り、或いは徒歩で歩む黛玉（或いは、黛玉とその背後の語り手）の視野の中に次々として描かれていくが、その描写の中で、「只見～」は次の(31)まで見られない。

(31) 黛玉方进入房时，只见两个人搀着一位鬓发如银的老母迎上来，黛玉便知是他外祖母。(黛玉が部屋に入ると、銀髪の老婦人が二人の人に支えられて迎えに出てくるのを目にして、黛玉は、祖母だと悟りました。)

祖母と孫娘との出会いと、それに伴う祖母の感動の表出とは、第3回の中でもクライマックスの場面のひとつである。この後、祖母と黛玉の会話が続く。次に「只見～」が見られるのは以下の場面である。

(32) 不一时，只见三个奶嬷嬷并五六个丫鬟，簇拥着三个姊妹来了。(まもなく、三人の乳母と五、六人の侍女に囲まれて三人の姉妹が現れました。)

(32) は迎春、探春、惜春の三姉妹の登場場面である。この後、黛玉をかこんでの会話が続く。次に「只見～」が見られるのは、王熙鳳の登場場面である。

(33) 一语未了，只听后院中有人笑声，说：“我来迟了，不曾迎接远客！”……黛玉……心下想时，只见一群媳妇丫鬟围拥着一个人从后房门进来。(その言葉が終わらぬうちに奥庭から笑い声が聞こえ、「遅くなりました。遠来のお客様をお迎えもしないで。’) …黛玉は…内心（誰かと）考えていると、多数の妻女や侍女に囲まれて、奥の間から入ってくる人がいま

す。)

王熙鳳の登場場面では、次の「只見～」も見られる。

- (34) 贾母笑道：“……你只叫他‘凤辣子’就是了。”黛玉正不知以何称呼，只见姊妹都忙告诉他说：“这是琏嫂子。”(贾母は笑顔で「この人は“辛子の鳳さん”と呼べば十分だよ。」と言いましたが、黛玉はどう呼べばよいか分からずにいると、姉妹たちがすかさず「これは琏のところのお嫂さまよ。」と教えてくれました。)

歓談の後、贾母の指示で、黛玉はおつきの婆やに連れられ、邢夫人、贾赦と順にあいさつに赴く。ここまでの長い叙述の中で「只见～」は一度も使われていない。そして、次に「只见～」が見られるのは以下の場面である。

- (35) 茶未吃了，只见一个穿红绫袄青缎掐牙背心的丫鬟走来笑说道：“太太说，请林姑娘到那边坐罢。”(茶を飲み終えぬうちに、赤い綸子の上着の上から縁をとった黒い緞子のベストを着た侍女がやってきて、にこやかに「奥方さまが、林の姫様にお越しいただくようにとのことでございます。」と伝えます。)

このことばを受けて黛玉は場所を移動し、王夫人に会って、二人の会話が続く。その後は、以下の場面で「只见～」が見られる。

- (36) 黛玉一一的都答应着。只见一个丫鬟来回：“老太太那里传晚饭了。”(黛玉が一つまた一つと答えていると、侍女が来て「ご後室様よりご夕食のご案内です。」と伝えます。)

黛玉は王夫人に連れられて贾母のところへ戻り、皆と歓談を続ける。次に「只见～」が見られるのは宝玉の登場場面である。

- (37) 一语未了，只听外面一阵脚步响，丫鬟进来笑道：“宝玉来了！”黛玉……心中想着，忽见丫鬟话未报完，已进来了一位年轻的公子。(その言葉も終わらぬうち、外から足音が聞こえます。侍女が入ってきて笑顔で「宝玉さまがお見えです！」と取次ぎました。黛玉が内心思案していると、侍女の取次ぎの言葉も終わらぬうちに、若い公子が入ってきました。)

宝玉の登場場面では、次の「只见～」も見られる。

- (38) 黛玉……心下想道：“好生奇怪，倒象在那里见过一般，何等眼熟到如此！”只见这宝玉向贾母请了安，～(黛玉は……内心「なんと不思議なこと、どこかでお会いしたよう、こんなに覚えがある気がするなんて！」と思っていると、その宝玉が後室にご機嫌の挨拶をするのが見え…)

このように、物語の展開のなかで、「只見～」に導かれる場面は、知覚主体<sup>5)</sup>の関心をひときわ引くような、詳細な描写にふさわしい場面である。「只見～」は事象や事実を主体の「見え」として提示する言語形式であるが、作品中のあまたの事象や出来事の中から、ことさら際立つ前景的な事象や出来事を選択的に引き出して描写しているものと考えられる。

## おわりに

「只見～」は以下のように整理できる。①前件と後件との間に見られる時間の重なりや隣接性が、この構造を成立させている。②前件においては、新たな視野を導くための条件となる場・状況などの設定がなされる（例えば：知覚活動（見る・聴く）、空間移動、姿勢の変化、時間や場面の提示）。前件に置かれた空間移動、姿勢の変化などを表す動詞（句）は、その動作・行為が遂行され完成・完了した場合であり、また、その他の動詞の場合は、動作・行為が「～している（進行・継続）」「～し始めた」「～したばかり」「～しようとしている」「～し終わっていない」などの段階にあることが要求されるのは、どちらの場合も、後件に述べられる「見え・聞こえ」としての事象や出来事と、前件の内容とが、時間的な重なりや隣接性をもちやすいという性質が見られるためと考えられる。③後件においては「見え・聞こえ」の内容が述べられるが、それは知覚主体にとって予測を超えた思いがけない現象・事象であり、かつ、ことさら注意を引かれるような前景的な現象・事象である。前件の内容と後件の内容とは継起する順に述べられ、かつ、両者の間に因果関係はない。④後件で述べられる現象・事象をそのまま示すのではなく、知覚主体の「見え・聞こえ」として提示することによって、後件の内容と知覚主体との間に接点があることを表していると考えられる。しかし、知覚主体は明示されず、文脈の中で必ずしも容易には特定できない。⑤『紅楼夢』などにおいて、物語の展開につながる新たな人物の登場がしばしばこの言語形式を用いて表されるのは、上の④によるものと考えられる。

「只見～」は旧白話章回小説に多用されているが、当代小説ではその使用度ははるかに低い。例えば、次の(39)、(40)の例では、旧白話章回小説であるなら

---

<sup>5)</sup> 錢1997. では、例(39)を挙げ、その英文訳についてコメントする中で、ここでの光景を目にする主体を黛玉であるとしている。306頁。

ば「只見～」が用いられるであろうと、容易に推測できるような典型的な場面が提示されているが、以下のように「只見～」は用いられていない。

(39) 我一脚踢开门进去，杜梅正一个人一边吃橘子一边看电视，床上摊了一片新买的衣服，神态怡然。(过把瘾就死) (扉を蹴り開けて入ると、杜梅がひとりのみかんを食べながらテレビを見ていた。ベッドには新しく買った服が広げられ、満足げな様子だった。)

(40) 两个孩子走到了汽车站旁边的点心店，里面只有苏妈一个人在擦着桌子，他们心里有点害怕了，站在门口不敢进去～(兄弟) (二人の少年が駅の脇の Snackbar 店に行くと、店内では蘇おばさんが一人でテーブルを拭いていた。二人は少し怖くなり、戸口に立ったまま中で中へ入る勇気がなかったが～)

「只見～」の中でも特に、新たな人物が空間移動によって物語の場面に登場し、その人物と知覚主体との会話が始まるところから物語の展開が進むという、旧白話章回小説『紅樓夢』などの中で頻用される定型化した用法は、今回の調査の限りでは当代小説の中にはほとんど見られなかった。これは、事象を知覚主体の「見え」として捉えるか、それとも事象をそのまま言語化して提示するか、という違いであり、つまるところ、誰の視点から事象が見られ、誰の視点から物語が語られているかという、語りの本質に関わる問題と切り離せないと考えられるが、その詳細な検討は稿を改めて行いたい。

## <参考文献>

原田寿美子1997a. 「小説内に見られる“見”“看见”“只见”等の用法について」『中国語学』244号、pp. 124～131

———1997b. 「“只见”の機能について」『名古屋学院大学外国語学部論集』8-2号、pp. 51-63

今井敬子1995. 「『紅樓夢』の語りの構造—空間・時間標識の機能—」『中国語学』242号、pp. 123-132

甲田直美2001. 『談話 テクストの展開のメカニズム』風間書房

毛修敬1987. 「談“只见～”的“只”」『语言教学与研究』第1期、pp. 23～32

钱冠连1997. 『汉语文化语用学』清华大学出版社

申小龙1988. 『中国句型文化』东北师范大学出版社

———2003. 『汉语与中国文化』復旦大学出版社

### 〈例文引用資料〉

曹雪芹『紅樓夢』人民文学出版社 1985年

吳敬梓『儒林外史』人民文学出版社 1977年

冰心「寂寞」『当代女作家作品选』花城出版社 1981年

李纳「撒尼大爹」 同上

杨沫「房客」 同上

王安忆『长恨歌』作家出版社 1995年

王朔『过把瘾就死』华艺出版社 1992年

余华『兄弟』上海文艺出版社 2005年

黎笏・訳「小小王国」『日本短篇小说选』人民文学出版社 1981年

(谷崎潤一郎「小さな王国」『刺青・異端者の悲しみ』講談社文庫)

吴树文・訳「蜘蛛丝」『芥川龙之介小说选』人民文学出版社 1981年

(「蜘蛛の糸」『芥川竜之介全集』第一卷 岩波書店)